



TITLE:

花山の光學室より

AUTHOR(S):

CITATION:

花山の光學室より. 天界 1933, 13(145): 186-187

ISSUE DATE:

1933-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162347>

RIGHT:

花山の光學室より

偉才中村氏が逝去されて後、空しく主なき室となつた光學研究室を計らずも非才淺學の小生が受持つて以來、これと云つた仕事も出來ずに居りますが、今度やつと故人の遺品(光學研究室内の物件のみ)の整理が出來ましたので、大畧ですが茲に報告致します。

全體を下記の五部に分類致しました。

A	中村氏の遺作品を主とするもの	69點
B	原 材 硝 子	155ヶ
C	研 磨 用 盤	84ヶ
D	研 磨 用 器 具	57ヶ
E	雑 具	79ヶ
合 計		444ヶ

以降、各部類中、特筆すべきものの二三を掲げて見ますれば、

A 部 類 中村氏作の拋物線鏡は殆んど處分されて居て、With 作の 25cm が目立つて居る。珍らしいもので、今後又と入手は出來ぬものだろう。球曲面が二個あるし、平面は 15cm 級のものが數個あるが、特に A.8, A.9 は全く缺點と云ふべき所のない位的良好なる作品で、これを見れば全く故人の技倆に一驚せざるを得ない。變つたものでは 5cm の小凹面鏡が30個近くあることで、F は大體70種内外であるが、どれを見ても甲乙を付け難い程粒が揃つて、然もよく出來て居る。ここでも全く故人の技倆に心服する。

B 部 類 これは割合に平凡であるが、30cm 23cm 20cm 各一枚及 15cm 級八枚の Cast disk があり、英國 Parson 製の White crown 硝子である。中にも 15cm の分は、どうしたのか厚さが 4cm 近いものがあり、流石の中村氏も厚すぎて手を附けられなかつたと云ふ珍らしいものである。他に新坡教接が外國より持つて歸られたと云ふ Lens 用硝子材が四枚あるが、硝子質が不明のため着工出來ないのが遺憾である。(色々探したが光學室には何も見當らなかつた。)

C 部 類 は極めて平凡なもので、總體にピツチや辨柄で汚れて居る。強いて云へば、例の 11cm の Triplet を製作された時の、とても凸凹の強い盤

が見當る位である。

D 部 類 此の中では三個の研磨器が目立つ。特に大型のものは 80cm 位のものまで、研磨し得るものであるに拘らず、一度も故人によつて使用されて居ない。他に荒播機と云ふ珍しいものもあるが、以上の四個の器械については、詳しくは故人が以前「天界」誌上に掲載されたから繰り返さない。ここで一言加へたいのは、故人が鏡面製作の時に常に、180#C. 3FC. 303# 金剛砂 (5—8分程度) 及び 606# 金剛砂 (20—30分程度) の僅か四階段で作業されて居た事で、素人の方々には稍や奇異な感を持たせる。猶ビツチが相當あるが、これは簡單には云へない。

E 部 類 は所謂雜具で、別段云ふ程のものもない。

以上で大畧に説明を致しました。目下小生は 8cm 級の對物 Lens と 13cm の豫備鏡を製作にかかつて居ります。勿論目的は寫眞玉の製作であります、今暫く研究が必要です。(木邊生)

遺 稿

光學研究室より スペクトロヘリオスコップ用の口徑10センチ焦點4米の長焦點鏡一對は焦點距離を揃へる事が第一の困難だが216號が393センチ、217號が395センチの二個に出来上つた。これだけ長くなると球面と拋物線の差も分らず、大體球面近い位にしか出来ない。反射鏡熱が大分下火になつて。従つて自分で作るものも少いが、仕事が少くなると下手になるし、偶に磨ると指を傷めて困るので、少々廣告して仕事を増す事にした。一週に、大小取りませ、一個やらないと、ぢきに下手になる。

(中村氏の遺稿より)

新 星 の 發 見 !!

コペンハーゲンよりの報知によると、去る3月20日、白國ユクル天文台のデルボルト、アレンド兩氏は、双子座に一新星(Nova Geminorum 1933)を寫眞で發見した。光度は11等級であつたが、其の後、急に減光して、一週間の後には17等級以下に降つた由。